

〔研究ノート〕

伊勢参宮の道とお蔭参り(上)

——「50年目の読者より」への追補をかねて——

青 木 郁 夫

秋草やむかしの人の足の跡

荷風

大正14年5月27日『杏花餘香』

序 言

大阪府と奈良県とを画する生駒山地は、金剛・葛城山地から連なる山岳信仰、修験の行場である。岩波書店刊『日本思想大系 20 寺社縁起』(1975年)所収の「諸山縁起」でも「北峯の宿」(p.129; 補注p.405)として記されている。「生駒聖天」として知られる宝山寺がある生駒山から信貴山に向かって北から南へと生駒山地の尾根を縦走していくと、宝山寺から役行者が開基した「元山上」である千光寺に至る道が並行して通っていることが分かる。千光寺には今でも修験道の行場がある(この道はさらに南下し信貴山に通ずる「山腹古道」と呼ばれる。修験道の道としての生駒嶺線などの平群谷における道路の展開については[『平群町史』, 1976, pp.544-56])。

生駒山地の縦走ルートには暗峠をはじめいくつかの大阪と奈良とを結ぶ峠道が交差している。今ではほとんど人が行き交うことがなく、せいぜいハイキングコースになっているにすぎない峠道もあるが、鉄道などの交通の便が開かれるまでは、人々はこうした峠道を往来したことであろう。そのなかで、十三峠は在原業平が河内の高安の女に逢うために通った道筋(業平道)だとされている(もちろん、伝承で、諸説がある)。生駒山地は「修験の道」と「色好みの世界」が相交差する場でもあったといえる。生駒山地を越える古い峠道を、人々は生活のために、信仰のために、その他諸々の目的のために

使ったに違いない。きっと、伊勢参宮の道としても用いたに違いないであろう。縦走をしながら、そんなことを考えた。それならば、確認してみるにしくはない。

前稿の「50年目の読者より」では、大和国中の伊勢参宮、とりわけ文政13年のお蔭参りの跡を辿った。しかもそれは限られた地理的範囲内で、自ら歩いた経験からの推測も含めて描いてみたものに過ぎなかつたので、前稿への追補の意をこめて、稿を起こしてみよう。前稿ではどうしても視点の置き所が大和国、しかも国中にあったため、大坂や河内国から大和国へ入る道筋、そして大和国から伊賀国へ至る道筋については全く不十分にしか言及していなかつた。そこで、まず、Iでは、伊勢参宮の道を概観したうえで、あまり触れられない大和国から大和高原・笠間峠を越えて伊賀国へ至る道筋と、忘れがちな太子道を利用した伊勢参宮の例を見ておこう。IIでは、北は暗峠から南は龍田越奈良道までの生駒山系、すなわち河内国から大和国の平群谷へ至る山越え道をたどり、文政13年のお蔭参りの跡を訪ねてみよう。そして、大坂から生駒を越え、大和街道・伊賀越奈良道へと至る伊勢参宮の道であった古堤街道も辿ってみよう。IIIでは、大和国から伊勢への道のひとつである「伊賀越奈良道」を辿り、文政13年のお蔭参りの跡を訪ねてみよう。現在は津市となっている旧久居市域は伊賀越奈良道の伊勢国側の主要地域でもあり、注目しておきたい。何故なら、大和国国中に視点を置くと、伊賀越奈良道は重

要な街道であるにもかかわらず、視野から外れがちになるからである。Ⅳでは、大和国における施行と大和国からのお蔭参りについて、文政13年のお蔭参りの際にも大和国の各地域から伊勢参宮に出かけた人々があったことを三重県史料によって確認し、明和7年及び文政13年のお蔭参りの際の大和国における施行の様子を地方文書によって見ていこう。そして最後にⅣでは、明和7年の雲やけ(オーロラ)については、前稿で十分に言及できなかつたことがらについて諸資料に拠つて補つておこう。

I 伊勢参宮の道を辿る——生駒山地越えの道、そして伊賀越奈良道へ

伊勢参宮の道

前稿で書いたように、「当然のことだが、時代により、またおかげ参りがどの地方、地域からのものであったのかによつても、そして途中にどこによるのかによつても、伊勢へのルートは異なつてきたことになる」。そのことを示す先行研究業績として[相蘇一弘, 1975]をあげておいた。ひとまずお蔭参りの場合を別としても、東国から伊勢参宮をする人々は、『東海道中膝栗毛』の弥次さん喜多さんのように、伊勢参宮にあわせて、西国巡りをしたり、西国三十三所巡りをしたりすることが多い。[小野寺淳, 1990]は諸種の道中日記によつて東国からの伊勢参宮ルートは「伊勢参宮+西国巡礼ルート」(西国三十三所巡りを含む)と「伊勢参宮モデルルート」(奈良大和・大坂・京都の社寺巡りを含む)が二大基本ルートであること、それぞれが時代を経るにしたがつて金比羅参宮に及ぶ「普及型」、岩国錦帯橋あるいは四国を経由する「拡張型」に変遷することを明らかにした。

伊勢参宮の道については、[奈良大学鎌田研究室, 2002]の序説2「近世の旅と伊勢」に各種道中記などをもとに要領よくまとめられており、地図も付されている(図1)。東国からは東海道を西行し、日永の追分から伊勢街道を進んで伊勢参宮に赴く。伊勢参宮をすませた後の西

国へのルートは、その人々の目的によつて、熊野街道へ行く者、伊勢本街道を榛原に出て大和に向かう者、六軒から青越奈良街道を行く者、月本の追分から伊賀越奈良道を進む者、津から伊勢別街道で関宿に出てそこから加太峠越え伊賀・奈良街道を行く者、あるいは関宿から東海道を進む者などさまざまである。これらのなかで、伊勢・大和間のルートは道中の難易や伊勢御師の誘導策などもあつて、「大阪・奈良方面からの参宮については、伊勢本街道・伊勢北街道(青越伊勢街道)の選択は、参宮者に任せられる感があるが、参宮後の大和入りについては、伊勢北街道への誘導が圧倒的に多い」とされている[安田真紀子, 2005]。

大和・伊賀・伊勢間の伊勢参宮ルートにおいては、「青越伊勢街道」と榛原の「札の辻」から田丸へ続く「伊勢本街道」が主要なもので、「伊賀越奈良道」は[奈良大学鎌田研究室, 2002, p.29]では「そのほか『伊勢街道』として使われた道」扱いであり(神童寺峠を越えるのは「大和側」ではなく、「山城側」であろう)、[安田真紀子, 2005]ではほとんど触れるところがない。ましてや、「加太越伊賀・奈良街道」については言及もされていない。しかしながら、地図に「加太越伊賀・なら街道」が、嘉永5(1852)年板行『浪花講定宿帳』, 2008, p.173に「奈良より伊賀越并かぶと越道」((なら・かも・かさぎより上)を経て長野峠を越え久居に出、月本で伊勢

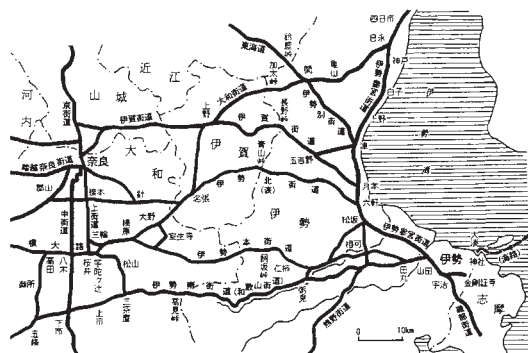


図1 伊勢への街道

出所, [奈良大学鎌田研究室, 2002, p.27]

街道に至る道(伊賀越奈良道)と、上野よりさな具・つげ・かぶとと進み、加太峠を越えて東海街道関宿に至り、伊勢別街道へ入る「上野よりかぶとこえ」が同じ項で記されている))に拠って表記されていることには注目しておいてよいであろう(この研究グループによる「加太越伊賀・奈良街道」の現地踏査記録[鎌田道隆・安田真紀子, 2006]がある)。

「加太越伊賀道」を通った伊勢参宮の事例に、弘化2(1845)年3月に吉野郡鷺尾口村から伊勢・熊野・西国三十三所の1～8番札所巡りをした5人連れの旅がある。伊勢参宮は、榛原・大野・三本松と進み、ここで宿泊し、翌日はそこから恐らく名張街道で伊賀上野に出、菅原神社(上野天神宮)東側の大和街道と伊賀街道との追分で中食をとり、「さな子(佐那具)」で2泊目。3日目は加太で中食を摂りながら峠越えをして東海道亀山で宿泊している。翌日は白子から津に至った[『伊勢熊の道中記』, 1991, pp.799-808]。また、元治2(1865)年に播磨国加西郡から伊勢参宮に赴いた一行が、伊勢からの帰路に加太越で奈良に至った記録が残っている[田中智彦, 2004, pp.294-5, 表1]。

伊賀街道加茂宿(京都府木津川市加茂町)周辺地域の伊勢講のいくつか((旧相楽郡銭司(ぜず)村(「和同開珎」などを鑄造した「鑄銭司」遺跡がある。旧津藩領, 現加茂町銭司)([井上頼壽, 1940]は「でず」とルビを付している。この春日四社明神の祭礼に用いられる「獅子面」は「御蔭踊の時に若中が大坂で誂えたもの」だという)、西小(にしお)村(旧久居藩領, 現加茂町西小)など))は、伊勢参宮の道筋として伊賀上野から柘植・加太を経る加太峠越道を通っている[井上頼壽, 1940, pp.259-64; 『加茂町史第二巻近世編』, 1991, pp.436-55]。

大和高原・笠間峠越

伊賀国と大和国とを結ぶ街道には、図1にもあるように、大和高原・笠間峠を越えて伊賀国赤目口・名張に至るルートがある。[拙稿, 2021, p.122]で触れた「北の横大路」から上街

道と交差する樺本を通り大和高原へ抜けていく道筋である。この道筋を通った伊勢参宮の事例に、平群郡東安堵庄(安堵町東安堵)の今村群義らが天明4(1784)年4月に出生した伊勢参宮の旅がある。今村ら一行は、安堵から「北の横大路」(もう少し南側の「業平道」といわれる道だったかもしれない)を通り、樺本から大和高原に入り、岩屋谷・堂ヶ谷・並松・福住・白石を通り、笠間峠を越えて、名張・阿保と進み、青山峠を越えて伊勢参宮をしている。帰路は伊勢別街道から東海街道に出、東海街道山科の追分で奈良街道に分かれ、歌姫経由で郡山を経て帰宅している[『伊勢参宮道之記』, 1992, pp.921-6]。

この伊勢参宮の道筋に文政13年のお蔭参りに関わるものが残されていないのであろうか。平群郡東安堵庄の氏神社でもある飽波(あくなみ)神社(祭神は素盞鳴命。いわゆる「太子道」に面している。聖徳太子の飽波宮跡という伝承もある)には、天保2年8月建立の太神宮「おかげ燈籠」がある。ここから東方へ進めば、現大和郡山市額田部南北町で昔の「下街道」と交差する。この辻に文久元年5月に建立された西面に「大峰山上五拾三度」と刻まれた石道標がある。それには、(下街道を北上して来て、その正面である)南面に「すぐなら郡山道」など、(下街道を南下して来て、その正面である)北面に「右多つた法りうじ」などと刻まれている。辻の少し北側には文政13年に建立された太神宮燈籠が建っている。また、下街道は現安堵町窪田(江戸期には平群郡窪田村)の東南を巡るようになって北上し大和郡山市額田部へ入っていくが、安堵町窪田にある八王子社境内には、天保2年建立の太神宮「おかげ」燈籠がある。安堵町笠目(江戸期には平群郡笠目村)の大福寺南西方の富雄川堤には、文政13年9月に建立された「太神宮燈籠」がある。こうした状況は、この地域からのお蔭参りや施行、あるいはお蔭踊りがなされたことを想起させる。

安堵からずっと奈良盆地を東に横切り、南北に通る上街道と交わるところに樺本の「馬出の

街並み」(現天理市樺本市場)がある。大和高原に入っていくためには、ここから古代には「都祁山道」[『都祁村史』, 1985, pp.14-7], 近世には(盆地よりの伊勢参りの人も近道として用いた)「高瀬街道」[『天理市史』, 1958, p.515]と呼ばれた街道を行くことになるが、現在ではその道を辿ることはできないので、地図上「都祁山道」と表記されている現県道192号線を東へ進み、並松(なんまつ)へ入るルートをとる。この大和高原・都祁地区に至る道に入る前に、上街道を少し南下し西名阪自動車道などを渡ったところをわずかに東に入ると、在原業平と父阿保親王を祀る在原神社(在原寺跡)がある。神社境内にはあの『伊勢物語』に出てくる「筒井筒」と伝わる井戸が残されている。業平道と思われる道と古代の中ツ道=「橘街道」[『同上書』, pp.512-3]とが交差するあたりに、在原業平が高安の女に会いに通う際に自らの姿を映し見たと伝承される「業平姿見の井戸」がある(安堵町の業平道沿いにある広峰神社前にも「業平姿見の井戸」とされる井戸がある)。

県道192号線は福住に至るまで大和高原へとひたすら登っていく。福住の集落を過ぎると道を「大和高原広域農道」にとる。春日台カントリークラブに沿って東南方向に進み、やがて左側の脇道にそれる。この脇道を進み県道38号線と交わると、道は県道781号線となり、いよいよ都祁地区に入っていく。並松では街道の北側に、建立時期は定かではないが「太神宮燈籠」が建っている([『都祁村史』, 1985, p.189]によれば、「天保11年大神宮月参講」建立)。ここから南にほぼ1kmほど行ったところに青龍寺(奈良市蘭生(いう)町)がある。この寺の前に「太神宮燈籠」がある。もはや竿の「太神宮」という文字しか判読できないが、かつて奈良石造美術研究会はこの燈籠には「文政十三寅九月吉日 太神宮 おかげ」と刻まれているとしている[牧村史陽, 1970, p.118]([荒井留五郎, 1992, p.280]は「天保十五年 太神宮 □□□□」)と判読しているが、[『都祁村史』, 1985, p.189]の記述から奈良石造美術研究会の判読

でよいのではないかと考える)。もとの道に戻り、今度は北北東方面に300mほど行くと都祁水分(みくまり)神社(奈良市都祁友田町)の参道に続くところに出る。都祁水分神社にも「太神宮おかげ燈籠」がある。奈良石造美術研究会[牧村史陽, 1970, pp.118-9]も「荒井留五郎, 1992, p.282」もともに、この燈籠には「文政十三年 寅 十一月吉日 太神宮 おかげ」([同上]は「大神宮」と刻まれているとしている。ただ困ったことに、水分神社に2度訪れたが、神社前においても境内においてもこの燈籠を見付けられなかった。2020年に「式年御造営」をしているので、この時にどこかに移したのかもしれない(社務所に宮司が不在なので問い合わせをしているが、未だに回答はない)。水分神社境内には「大神宮」と刻まれた燈籠が本殿横に1基あるが、「大神宮」以外は全く判読できなかった。[『都祁村史』, 1985, p.189]が「友田村、蘭生村には『おかげ』と刻まれた燈籠がある」としているのは、水分神社と青龍寺とのそれぞれにある「太(大)神宮燈籠」であろう。いずれも、文政13年のお蔭参りを記念してのものである。

[『同上書』]によれば、都祁地域には文政13年のお蔭参りの際に奈良の樺本からだけでなく田原方面からも伊勢参宮の人並みが押し寄せたという。そのため、「村々は食事を施し、宿を提供する。『施行茶粥』とて粥を供した村も多かったという。…各村村の人たちも参宮した」という。「茶粥」の施行とはいかにも大和国らしい。都祁地域においても、文政13年のお蔭参りの際に施行がなされ、伊勢参宮もなされたのである。

白石地区の古墳群「三陵墓」などを見ながら都祁地域を東に抜けていくと宇陀市に入る。「多田源氏の郷」である室生多田、「染田連歌堂」「染田天神社」がある室生染田を経て県道781号線を進んでいく。室生上笠間の川上川右岸には室町時代中期に刻まれた阿弥陀如来立像(阿弥陀三尊)磨崖仏がある。上笠間の集落を過ぎると三重県名張市側へと続く笠間峠にかかる。笠間峠を一気に下ればそこは赤目口(三重県名張

市赤目町)で、青越伊勢街道に交わることになる。

奈良国中・太子道

[奈良大学鎌田研究室, 2002]では奈良盆地内の道は、暗越奈良街道から上街道を通り三輪から慈恩寺の追分で初瀬街道へ至るルートと竹内街道から横大路・初瀬街道に至る街道が主要街道とされている。地図には中街道が表記されているが、これは道中記の西国巡りの道筋のひとつとして記述されていることに拠っているのである。前稿で私が触れた「田原本」から南東方面へ斜めに進み、初瀬川沿いなどの三輪街道から初瀬街道へ至る道については[同上]は言及していないが、天保13(1842)年板行の『大日本諸国道中案内記』にある「京大坂より大和めぐりはせごへ参宮道」の絵地図には、「二かい堂」から「たわら本」へと中街道を南下し、「たわら本」から「三之町」を経て「三わ」に行き、そこから「金や(金屋)村」「志をんじ(慈恩寺)」の追分を経て初瀬街道に至る道筋が描かれている。また「二かい堂」からは「法りうじ」に通じ、「龍田越奈良街道」に至る道も画かれている[『大日本諸国道中案内記』, 1998, p.84]。この点も確認しておこう。

こんな記録が残されている。享和3(1803)年3月に伊勢参宮に出た谷甚四郎ら一行8名の行程は、青越伊勢街道—伊勢別街道—東海道を巡るものであった[「参宮万日記」, 2001, pp.497-509]。谷甚四郎一行の初日の行程をみると、達磨寺がある葛下郡門前村(現北葛城郡王寺町本町)を出発し、「黒田」(式下郡黒田村。孝霊天皇黒田廬戸宮跡ともいわれる法楽寺がある。現磯城郡田原本町大字黒田)で休んでお茶を飲み、「俵本」(田原本)で中食を摂り、「三輪」で小休止をし、「初瀬」に泊まっている。この日記から甚四郎一行の行程は、龍田越奈良街道から太子道へ分かれて南東方向へ行き(あるいは、門前村から馬見丘陵を東南に越えて箸尾に出、さらに東方の黒田から太子道を進み)、「俵本」を経て三輪街道を進んだと考えられる。

II 生駒山地越えの道

奈良・大和国から大坂方面へ至る街道は、道中記では奈良町からは暗越奈良街道が主要道であり、南の横大路からは竹内峠を越える竹内街道が主要道である。地図には他に法隆寺・龍田越奈良道が描かれているにとどまる。そして、大和国と大坂とを繋ぐ街道として、地図上、暗越奈良街道の北に描かれているのは古堤街道・清滝街道である。

ここで、追補として見ておきたいのは、大坂・河内国(といっても現在の東大阪市・八尾市・柏原市の中河内及び南河内地方であるが)から大和国へと至る道である。主要街道にアクセスできる道はそのままだこまでも続くことになるので、課題をもっと明確に絞れば、伊勢参宮(焦点は文政13年のお蔭参りにある)の人々の往還が認められるような道を、北は暗峠から南は大和川までの間の生駒山地(南限が大和川)を越える道で確認できるかということである。

関西の山越の古道を実地検証した[中庄谷直, 2006, p.2]が言うように、「…生駒山系を越える山道は、江戸期には20ばかりもあったとされている。ただ、これらの道は、(中略)生活のため、あるいは信仰や行楽のためのものであり、したがって余分な労力を使用せずに、単純に、より近く、より安直に、この障害物を越えるのが目的であった」。そこに行く者が多くなれば、それが道になり、そこに呼び名が付けられ、ますますより多くの人々が様々な目的でそこに行くようになるのである。自然現象が道を崩壊させたり、あるいは社会的変動などによってそこに行く者が少なくなれば、やがてそこは獣道のような痕跡を残すのみになってしまうこともあるだろう。

大坂から奈良盆地方面を望めば生駒山地・葛城金剛山地がよく言われるように屏風のように立ちはだかっている。これらの山地を越えるために、人々はその目的に応じて、より簡便に、より安全に、より短時間でいける所を見だし、道筋をつけていくことであろう。[中庄谷

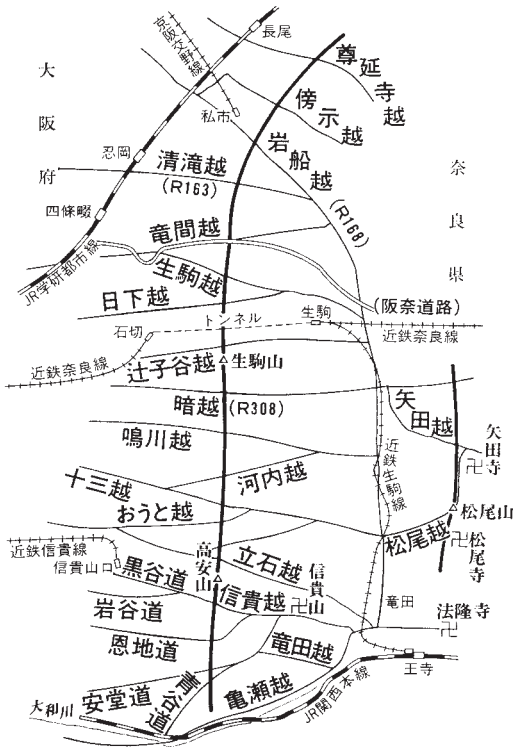


図2 生駒越えの峠道

出所, [中庄谷直, 2006, p.8]

直, 2006, p.8] は生駒越の古道として、暗越から大和川までの範囲で、北から鳴川越、十三越、おうと越、立石越、(黒谷道、恩地道などから入る) 信貴越、竜田越、亀瀬越などをあげている(図2)。明治初期の平群地域の道は生駒川(竜田川)沿いに南北に通る清滝街道と東西に十三峠を通る山道が主要なものであったという『平群町史』, 1976, pp.245-8]。

古絵地図

まず、文政13年のお蔭参りをはさんだ時期の古絵地図で確認してみよう(古地図はいずれも奈良県立図書情報館まほろばライブラリー)。

ひとつめは「大和めぐり道法絵図」(天明2(1782)年)である。この絵地図では、大道(おおみち)は太い——、問道(あいみち)は細い——で描かれ、地区についても宿場(やどば)と村里(むらさと)に分けて示されている。大

和国から河内国へ越える主要な街道は、北から南に並べると、1)暗越奈良街道、2)「立野ごへ、あを谷ごへ」ともいう龍田越奈良街道、3)横大路の「たか田」から「国分越へ」で長尾街道へと続く道、そして4)横大路から竹内街道へと続く道「竹ノ内越へ」の4つの「大道」が描かれている。「問道」は、1)「郡山」から矢田寺がある「やた」を経て矢田丘陵を越え、生駒山地へ入り元山上千光寺がある「鳴川山」から北方の宝山寺方面に向かい暗峠越街道へ出る道、2)龍田越奈良街道の「たつた」から北西の平群方面の生駒山地に入り十三峠から高安方面に下りていく「十三とうげ越へ」、3)「たつた」から朝護孫子寺がある「志ぎ山(信貴山)」を越えていく「志ぎごへ」、4)横大路宿場「たか田」から當麻寺がある「たへ満」を経て岩屋を越え竹内街道の山田に至る「岩屋ごへ」の4つの道が記されている。

もうひとつは、「方角改正 五畿内照覧」((天保12(1841)年板行))でそれまでの「西国三十三ヶ所めぐり絵図」((文化9(1812)年板行))など多くの絵地図に見られるような「方位錯置、遠近失度」の欠点を改善したものであり、しかも広域の諸国を表す地図であることによって、この追補との関連でいえば、河内国と大和国とを生駒山地を越えて結ぶ街道や道筋、すなわち生駒の峠越えと主要街道へのアクセスなどの有益な情報を与えてくれる。

但し、街道はすべて——で示されており、「大道」と「問道」を区別していないが、他の絵地図と比較すれば違いは明らかにできる。北から南に街道や生駒越え道を並べると、1)暗越奈良街道、2)龍田から竜田川沿いに北上し生駒山地へ入り「鳴川千光寺」を経て暗越奈良街道へ、3)龍田から龍田越奈良街道を進み北西の平群方面の生駒山地に入り十三峠から高安方面に下りて行き、北上すれば豊津で暗越奈良街道に至る。西方へ進めば福万寺を経て若江に至る、4)龍田越奈良道「勢野」から「信貴」山を越え、西方へ進めば「教興寺」を経て天王寺へ、さらに南下すれば住吉大社方面へ、5)龍田越奈良街

道は龍野・亀ヶセ・青谷を経て、大和川を越えて(河内)国分で長尾街道に至る道、が描かれている。

大和川南側では横大路の高田から當麻寺を経て北上し、1) 達磨寺(奈良県北葛城郡王寺町)から西方へ「ヒルメ(送迎)越へ」して国分で長尾街道に至る道、2) 同じく當麻寺を経て北上し、達磨寺に至る手前で西方へ「関屋ごへ」して国分で長尾街道に至る道、3) 當麻寺から北上し、「染寺(石光寺)」(葛城市染野)から西方へ二上山の北側を巡る「穴蒸(穴虫)越へ」をして、飛鳥を経て古市で竹内街道に至る道、4) 當麻寺から二上山の南側を巡る「岩屋ごへ」をして山田で竹内街道に至る道、そして5) 新庄(現葛城市新庄)から竹内峠を越える竹内街道、が描かれている。

二つの絵地図に描かれた「間道」はほとんどが或る寺社への参詣道であるし、暗越奈良街道・龍田越奈良街道・長尾街道・竹内街道という主要街道へ連絡する道である。そのため、先にみた「伊勢への街道」(図1)のように、これらの道が伊勢参宮から西国を巡るための道中記に記されることはほとんどない。

生駒山地越えの道歩く

ここで課題としている範囲の生駒山地越えの道を、実際に歩いてみよう([中庄谷直, 1996]を参照し、近畿日本鉄道(株)発行の「近鉄てくてくまっぷ」や、行政区域内に生駒山地を含むいくつかの自治体が組織する「生駒山系広域利用促進協議会」が作成した「生駒山系ハイキングガイド24コース『いこいこまっぷ』」を手にして)。

鳴川越 古絵地図では鳴川千光寺からは北上して暗越奈良街道に至る道が描かれているが、元山上千光寺参りをする際に「公共交通機関のなかった時代には、大阪側からは鳴川峠を越えていく道をたどった」[武藤善一郎, 2000, p.97]ということであるから、鳴川峠越えの道はそれなりの時代を遡って存在していたのであろう。大坂から暗越奈良街道を東に進むと東大阪市

菱屋東に八剣神社がある。この境内には天保2年2月に建立された「おかげ 左り ならいせ」の石道標のほか、「右 鳴川山 千光寺 役行者 道」と刻まれた石道標もある。八剣神社の西側を南北に河内街道が通っており、この石道標は鳴川峠そして千光寺へ参詣する人々を案内するものであった。鳴川越道は、大和国内においても河内国側からも、大和側の鳴川にある役小角が大峰山頂の山上が嶽に修行根本道場を開くまで修行に励んだ千光寺(元山上。母である白専女がここでその後の修行を続けたこともあり、大峰山が女人禁制であるのに対して、女人山上ともいう。近鉄生駒線元山上駅を降りると「役行者旧跡 女人山上道 元山上千光寺 右是ヨリ二十四丁」と刻まれた石柱がある)への参詣道である。現在も鳴川の谷川、溪谷に行場があり、修行が行われている。鳴川の集落に入る前に清滝石仏・磨崖仏群があり、苔むした石仏・磨崖仏が森閑とたたずんでいる。鳴川の集落から生駒山地の中腹を北に向かって宝山寺(生駒聖天)へと続く道が通っている。千光寺からさらに山地を上がり、鳴川峠を越えて河内側に降りていくと、八尾市六万町に至る。大和側は山地を登っていけば鳴川が、河内側でも長門川が流れ、秋には木々の紅葉・黄葉が美しい。ここではとりわけ伊勢参宮に関する遺物を見出すことはなかった。

十三越(河内からの登り) 十三越は十三峠を越える道で、平群町発行の「平群町ハイキングマップ」では「十三街道と業平ロマンの道」として福貴畑地区の北側を回るルートと南側を回るルートをあわせている。業平ロマンの道は、『伊勢物語』の23段にある「をとこ」が「河内の国高安の郡」の女のもとに通う物語にちなんだ道である。『河内名所図会』の高安郡の項に「十三峠」があり、そこには「神立より大和国平群郡の界まで廿三町嶺の路傍に塚十三ありこれによって名とす何者の塚といふ事を志らず此街道大坂より大和龍田法隆寺初瀬等へ越える道すじ也泊屋茶店あり」と説明されている[秋里籬島, 1801, 巻ノ5ノ15]。この説明からすれば、

河内側から十三峠を越えて大和国平群郡に入り、竜田川に沿って岩船街道・清滝街道〔武藤善一郎, 2000, p.102〕を下り龍田越奈良街道に出て、そのまま南都奈良に回り上街道を南下するかあるいは太子道から田原本・三輪街道を辿るかは別として、初瀬街道に至り、さらに伊勢街道を進むことがあるということの意味している。

〔武藤善一郎, 2000〕は自ら丹念に街道を歩き、道標を一つ一つ確認した著作だけあって、十三街道についても詳しい。十三街道は玉造から暗越奈良街道を東に若江、長堂と進み、ここで南下し「俊徳道」に入り十三峠に続く道ともいわれるが〔『八尾市史 文化財編』, 1977, p.265〕, 〔武藤善一郎, 2000〕は天王寺から続く「俊徳道」から十三街道へ続く道筋を、それを指し示す道標とあわせて記述している。十三街道は東方へ八尾市福万寺町・福栄町を通って東高野街道と交差し、南東方面へ進む。国史跡として整備された心合寺山(じおんじやま)古墳の北側を巡って神立(こうだち)6丁目で十三峠に登る道と交わる。この交差点西南角に安政2(1855)年9月建立の石道標があり東面に「右 大阪 江」、北面に「左 信貴山 米尾山 たった ほうりうじ 大和みち」と刻まれている。神立辻地藏堂を過ぎ、いよいよ本格的な峠道にかかる所に神立茶屋辻の碑がある。碑には在原業平と茶屋福屋の娘梅野との物語が書かれている。峠道は水呑地藏までは地藏が案内してくれ、ここを過ぎ十三峠に至る。十三峠はその頂点に13の塚があったことから十三塚と呼ばれたことに由来する。十三峠の石仏横に「右 たつ田(龍田) 本うりうじ(法隆寺) 道」と辛うじて読める道標がある。それ以上の判読は困難だが、元禄2(1689)年10月に建てられたものである〔平群町教育委員会, 1992, p.30〕。

ここから生駒山地の嶺を少し南下すると、縦走路から左にすなわち東南の龍田方面に下る山道が続いている。この山道をしばらく進むと、時期は分からないが、大和屋仁兵衛が建立した自然石の道標があり、東(大和方面)に面して

いるこの道標には「右 大坂」「左 ひらの 住吉」と刻まれている。しかしながら、この道標に従って左へ行こうとしても、藪に覆われた崖があるだけでとても峠道があるとは思われない。ところが、この道標はわれわれにとって(というのはこの追補にとってという意味だが)重要な意味をもったものであった。実は、道標の「左 ひらの 住吉」は「おおと越」を指していたのである。

おおと越 「おおと越」(おと越とも)は古絵地図にはない。八尾市立歴史民俗資料館発行の「資料館周辺の史跡」には、「おと越」が、すでに廃道となっているためか、点線で示されている。住吉大社参詣道であった八尾街道・住吉街道は住吉大社の西側から東へ向かい、長居、平野郷南部を経て、八尾本町に至り、ここで北から来る河内街道と交わる。この交差点付近に嘉永5(1852)年建立の石道標が立っている。この石道標は、河内街道を南下して来た者にとっては「左 信貴山 ならいせ 道」、街道を北上して来た者にとっては「右 信貴山 ならいせ 道」を指し示している。交差点やや北から東に「立石街道」と呼ばれる道があり、この道を



十三街道石道標(「おおと越え」か)
「右 大坂」「左 ひらの 住吉」

Oct. 2022

伊勢参宮の道とお蔭参り(上)

東から来た者にとっては、すぐ「大坂 玉造 平野 天王寺 道」を指し示す。この道標は比較的近い寺社への参詣道を示すだけでなく、伊勢参宮の道筋をも指し示している[武藤善一郎, 2000, p.113]。立石街道の名は立石峠を越える「立石越」によるのであろう。

立石街道を東へ進むと、街道沿いの石道標には「をうとう越」、「おとうごえ」、「おうとごへ」が刻まれるようになる。高安小中学校正門前に、天保11(1840)年9月に服部川村の西国三十三所観音講同行が願主となって建立した道標があり、「右 信貴山 立石」「左 おうとごへ」と刻まれている。ここで「立石越道」と「おうとごへ道」とが分岐する。おとお越道は旧大窪村(八尾市大窪)に進むと、大窪公園(御祖神社跡)に天保2(1831)年3月建立の「おかげ燈籠」がある。この燈籠が文政13年のお蔭参り、あるいはお蔭踊りに関連していることは明らかである。山地に向かって上がって行くと、「左 おうとごへ」の道標があり、大窪と神立の境あたりに天保15(1844)年3月に大窪村が願主となって建てた石道標がある。南面には「右 おとごへ道 ほうりょうじ」と、(おとごへ道を下ってきた者に面する)右(東)側面には、「左

八尾 平野道」と刻まれている([『八尾市史文化財編』, 1977, p.268; 西辻豊, 1981, pp.23-4], では、「おと越(大戸越)」とし、道標には「右 おとごへ道 ほうりょうじ」「左 八尾 玉造道」と刻まれているとしてある。[武藤善一郎, 2000, p.96]は、私が実見したと同じように、「左 八尾 平野道」としている。「平野」と掘直したのであろうか。八尾市市史編纂室に確認してみたが、今や不明とのことであった。市史編纂室には他の史料とあわせて御教示いただいた。記して感謝の意を表したい)。この道標は、おとごへ道が生駒山地を平群へ下りて行き、龍田越奈良道に至ることを示している。おとお越道をさらに進もうとしたが、やがて畑・農地・藪となり、諦めざるをえなかった。武藤善一郎氏は、諦めることなく、執拗に「おとお越」を試みられたようで、ついに十三峠のハイキング道に出ることができ、先の自然石の道標に至ることができた[武藤善一郎, 2000, p.94]。古絵地図には描かれていない「おとお越」も、南河内の人々にとっては伊勢参宮にも利用された道だったのであろう。

十三越(大和への下り) 十三峠から「おとお越」への道標と考えられる道標がある山道を東



八尾市大窪 大窪公園 おかげ燈籠
天保2(1831)年3月建立



八尾市大窪のおと越え石道標
天保15(1844)年3月建立

南東方面に下って行くと福貴畑の南側を巡ることになる(平群町発行「平群町ハイキングマップ」「十三街道と業平ロマンの道」の福貴畑南側を回るルート)。福貴畑は花卉、とりわけ小菊の生産地であり、秋が深まった頃には、栽培畑には色とりどりの小菊が咲き、農家はその出荷に忙しく働いていた。道はほぼ東に向かうようになり、小集落を過ぎていくと福貴畑の片福貴三叉路(信貴山道と分かれる)に道標がある。この道標は安政2(1855)年に建てられ、道を下ってきて面することになる西面には「左 た津多(龍田) 法里うじ 奈良 いせ道」と、そして、南面には「右 信貴山 米尾山 毘沙門天王出現所 七丁」と刻まれている。ここに「いせ道」へ導く道標があることに注意しておくべきで、十三峠越が伊勢参宮の道として利用されたことを物語っている。この三叉路を左にとり、すぐにまた東方面から東南方向へと道は下っていく。やがて、越木塚を経て竜田川へと至る。竜田川沿いに南下すれば、龍田越奈良街道に交わる(〔大田区立郷土博物館, 1997, pp.50-1〕所収の絵図「月瀬嵩尾山長引梅溪道の栞」(暁晴翁作, 松川半山画, 安政5(1858)年板行か〔水谷知生, 2020, p.47〕)では、大坂から暗越奈良街道を深江まで進み、ここから十三街道に分かれ、十三峠越で龍田・法隆寺に出て、上街道の丹波市に至る道筋が描かれている。絵図には中街道が描かれていないので、法隆寺から丹波市にどのように至るのかは想像するしかない。中街道の二階堂から東へ丹波市へ向かうことも考えられる))。

ここで注目しておきたいのは、越木塚の北方で、近鉄平群駅から西に1kmほど行った福貴(大字)地区に2基の「おかげ燈籠」が存在することである。福貴地区は道路で分断された形になっているが、地区の南側の栗坪垣内(中央の辻)に天保2(1831)年6月建立の「おかげ太神宮燈籠」があり、地区の北側の森垣内(中垣内)には慶応4(1868)年3月(いまや目視では読めないが)建立の「おかげ太神宮燈籠」がある。前者は文政13年のお蔭参りに、後者は慶応3年

の「ええじゃないか」に関連している。森垣内は「北福貴より中福貴に至る道と信貴山より竜田に通じる道との三叉路」であり、栗坪垣内中央の辻から「南すれば伊勢吉野道」であり、西は信貴山や十三峠に向かう山道へと続いており〔平群町教育委員会, 1992, pp.26-7〕、これらの「おかげ燈籠」がお蔭参りに関連していることは明らかである。しかしながら、それがお蔭参りに出たことに関連しているのか、施行をしたことに関連しているのか、お蔭踊りに関連しているのかは、燈籠の建立施主とともに、残念ながら不明である〔平群町役場, 1997〕。

十三峠越をした伊勢参宮の道中記録が存在する。〔田中智彦, 2004, pp.292-3, 表1〕に播磨国からの伊勢参宮道中日記がいくつかあげられている。そのなかで、大坂から直接に奈良に向かった5例のうち〔同上, p.307〕、2例は竹内街道を通り、1例は暗峠を越え、1例は十三峠を越えている。あと1例の「分銅講」史料は未見であるので明確には分らないが、暗峠を越えた伊勢講と同じ加古郡東二見村の伊勢講であるので(現明石市東二見)〔小野寺淳, 1995, p.86〕、(奈良から吉野に寄っているが)おそらく同じ経路を通ったのではないと思われる。〔田中智彦, 2004, pp.292-3, 表1〕から、伊勢参宮において大坂から大和国に至る道筋は暗越奈良道だと早合点してはならないかことがよく分かるであろう。大坂から竹内街道に行くのは、四天王寺や上ノ太子を通ることから、太子信仰とも関わっているのかもしれない。

十三峠越をした記録は、加古郡平野村(現加古川市加古川町)から宝暦14(1764)年に伊勢参宮をした者たちの「道中諸入用記」である。これによれば、女性を含む一行は、村から兵庫に出て宿泊し、ここから舟で大坂に向かい、その日は大坂泊まり。翌日、十三峠越えをする。十三峠で昼食をとり、この日は龍田に泊まっている。龍田からは「龍田越奈良街道」でならに出て、ここで昼食をとって、上街道を南下し「おひとけ(帯解)」で泊まる。かなりゆっくりした旅だが、その後は三輪→榛原→青越伊勢街道を

Oct. 2022

伊勢参宮の道とお蔭参り(上)

進み→松坂→伊勢に至っている。帰り道は、伊勢別街道から東海道を通っている[兼本雄三, 2000, p.5]。十三峠を越えさらに矢田丘陵を越える道筋もあるが、この伊勢参宮の一行は女性を含むこともあってか負担の少ない道筋を選び、龍田に出て龍田越奈良街道を進むことを選択している。きっと龍田大社、龍田神社(現在、境内に能楽の「金剛流発祥之地」碑がある)や法隆寺にも寄ったことであろう。確かに、十三峠越での伊勢参宮が記録されているのである。

立石越 立石越も古絵地図にはない。八尾市観光協会「八尾観光WEB」の「八尾市観光モデルコース」のうち「おと越街道～立石街道の一周コース」と、奈良県ホームページ「歩く・なら推奨ルートマップ」のうち「霊峰信貴山と戦国の夢街道」を持って立石越をした。立石越道は八尾市立高安小中学校正門前で「おと越道」と分かれて南側へ回って生駒山地に向かって進む。来迎寺・高安千塚古墳群を過ぎて、山道にとりかかる。台風などの影響で一部山道が崩落していたり、また倒木もあるが、峠道を上って行くと、ほぼ上りつめたところで道が二つに分かれる。ここに享保20(1735)年4月に久安寺

村(旧平群郡久安寺村, 現生駒郡平群町久安寺)の市兵衛が建立した地蔵が立っており、道標を兼ねている。地蔵には「右 しぎ山 たつた道」「左 まつのを山え」と刻まれている。ここを右に道を取り、生駒縦走ルートに出、「一元の宮」手前から大和側に下りていく。久安寺、信貴畑を経て、越木塚あるいは榎原(ふしはら)から竜田川に至る。[中庄原直, 2006, p.61]によれば、この下りルートは新道であり、旧道は勢野方面に下って行き龍田越奈良道に至るルートである。この峠道には伊勢参宮を特に意識させるようなものは残されていなかった。

立石越を越木塚あるいは榎原を経て竜田川に下り、竜田川沿いの道を南下すれば、十三峠越えの道と同様に、椿井橋に至る。椿井橋東詰に引化4年に椿井村世話人中が建立した石道標などが立っている。弘化4年の石道標は平群谷の東西南北の街道筋を総括的に示していて、東面には「すぐ こしき塚 十三峠 八尾 ひら野 大坂 道」、西面には「竜田川 法隆寺 郡山 なら 初瀬 道」、南面には「松尾道 矢田道 生駒 岩船越 八幡 道」と刻まれている[『平群町史』, 1976, p.550]。つまり、大坂・八



十三街道石道標 安政2(1855)年
平群町福貴畑(片福貴三叉路)



平群町福貴栗坪垣内のおかげ燈籠
天保2(1831)年6月建立

尾方面から十三峠・おとお越・立石越で生駒山地を越えれば、龍田越奈良道に続き、その先には初瀬から伊勢へと繋がる街道があることを示している。

恩知越 八尾市教興寺から信貴山朝護孫子寺(奈良県三郷町)への参詣道であり、大和の龍田、法隆寺へと峠を越えて行くいわゆる信貴越にはいくつかの道がある。八尾側からは黒谷道が本寸法であろうが、以前、東高野街道を歩いた時に、恩地神社の大鳥居が見え、その辻にある道標(明治4(1871)年のもの)に「東 信貴山」と刻んであったことが記憶に残っていたので、恩地越・信貴越をして大和の勢野方面に下りてみることにした。

東高野街道を恩地神社の大鳥居が見える東方に折れて進むと、やがて恩地神社のやや長く高い石の階が見えてくる。石段を上がって恩地神社社殿に出、そこから北側へ回り恩地越の山道を上って行く。農業公園信貴山のどか村手前の地藏尊を左折し、信貴山朝護孫子寺をめざす。信貴山に着き、朝護孫子寺の伽藍を巡り、霊峰館で国宝「信貴山縁起絵巻」の「延喜加持巻」な

どを見た。その後朝護孫子寺から大和へ下って行く道は、他の信貴越道と同じである。[中庄原直, 2006, p.68]によれば、旧道は勢野へ下りる道であった。近鉄生駒線「信貴山下駅」に下りてくるのだが、ここから北東方向に道を取り、県道194号線に出て勢野(生駒郡三郷町)の交差点方向へ進むと、その途中の勢野西墓地の(県道に面する)前面に「鴈半右衛門墓」があり、これが道標にもなっている。この墓道標(関取道標というらしい)は相撲頭取鴈(いかるが)半右衛門の門弟中が明治13年12月に建てたもので、ここが龍田越奈良街道に面していたことから墓道標にしたものであるという。つまり、信貴越をして龍田越奈良街道に出て来たということである。鳴川越以下の生駒山地越えの道は、竜田川沿いの清滝街道を南下すれば龍田越奈良街道に至るのである。

恩地越・信貴越道には伊勢参宮に直結しそうな道標などは特に見当たらなかったが、勢野まで出てくるとそこはもう龍田越奈良街道の世界となる。勢野東の真言律宗補陀洛山持聖院(かつてあった惣持寺の塔頭の一つ)の北面した門から西に道を下った民家の前に文政13年11月に建立された「御蔭」と刻まれた太神宮燈籠がある。『三郷町史』を見ても、お蔭参りやお蔭踊りとどのように関係しているのかは残念ながら分からない(「竜田越」については、[『三郷町史』, 1976]が519頁以下で詳しく解明している)。

弘化5年3月に和泉国日根郷から伊勢参宮をした道中日記が残されている。それによると、一行は日根郡から堺に出、そこから藤井寺、道明寺と進んで石川を舟で渡り国分に至った。国分から大和川を舟で渡り、立野から龍田、法隆寺、小泉、郡山、奈良と「龍田越奈良街道」を通っている。奈良を見物した後は上街道を下り、三輪、初瀬、榛原と進み、伊勢本街道で伊勢に至っている。復路は伊勢から津に出て、浄土真宗高田派総本山専修寺(高田別院)を参詣しながら伊勢別街道を通り、東海道関宿に入り東海道を京まで進んだ。京見物の後、伏見から大坂まで



椿井橋東詰石道標(弘化4年)
東面「すぐ こしき塚 十三峠
八尾 ひら野 大坂 道」



鵜半右衛門墓(明治13年12月建立)

西面「すぐ 龍田 法隆寺 郡山 奈良」

東面「すぐ 龍田本宮 信貴山 大坂 さかい 道」



持聖院近くの御蔭燈籠

文政13年11月建立

は舟で下っている。この旅は伊勢参宮とともに、奈良・京都を巡ること、有名社寺に詣でることも目的であったように見える〔「伊勢道中記」, 1982, pp.682-5〕。

古堤街道—大坂(京橋)から伊賀越奈良道へと続く道

次の課題に取り組む前に、大坂から大和国北部の生駒山地を通り木津に至り、伊賀越奈良道を辿る街道があったことを確認しておこう。大坂京橋から京都へ至る「京街道」と分かれて東方面へ向かう「龍間越古堤街道」がある。この街道は現在の大阪市、大東市とJR片町線・寝屋川沿いに進み、大東市の中垣内(なかがいと)でここを南北に通る東高野街道を横切って山手に入って、龍間から(現)生駒市高山町芝に至る〔武藤善一郎, 2000, pp.101-4〕(寝屋川の北側川堤に行くこの街道は、野崎観音(慈眼寺)参りのための旧「野崎道」でもある。野崎観音には浄瑠璃「新版歌祭文」(近松半二作)に描かれた「お染久松」を追悼した墓がある(大坂近在の参詣遊山地としての「信貴山方面」「生駒・奈良・野崎方面」について言及したものに〔田中智彦, 2004, pp.324-5〕がある)。古堤街道からは中垣内で交わる東高野街道を北上すれば野崎に至る))。ここで「一条街道」に入り、生駒の「鹿畑南部」を経て「大字鹿畑字仏坂」で「一条街道」に分かれて「伊賀街道」に入り木津に至る〔生駒民俗会, 2015, p.103〕(〔生駒民俗会, 2015, pp.43-52〕は阪奈道路上下線が合流するあたりにあった茶店「大文字屋」で古堤街道が南北に分かれるとしているほか、北ルートも〔武藤善一郎, 2000〕とは異なるルートを示している)。

この街道沿いで大和国に入るまでに、天保3年の道標(城東区今福南の皇天神社内)と天保2年の道標((茨田中学校内(鶴見区諸口3丁目)に移設))に「右 いせ なら のざき」と刻まれたものがある。道は戻るが、片町線放出駅東300mほどのところにある阿遲速雄神社(大阪市鶴見区放出東3丁目)には、仁兵衛ほか37名の結縁が慶応4年3月に建立したおかげ大神宮燈籠がある(大阪市内唯一)。これは慶応3年のお蔭参り・ええじゃないかに関連している。寝屋川沿いを放出から進むと徳庵(鶴見区徳庵)を通る。ここは「野崎参りの屋形船、徒歩道ひろふ諸共に」という文句がでてくる浄瑠璃『女

殺油地獄』(近松門左衛門作、享保6(1721)年)「徳庵堤の段」の舞台である。

街道を進み大東市に入り、片町線鴻池新田駅前から北上し、「枕草子」第17段「淵は…」にも出てくる「勿入淵」跡手前を右折し東に進む(通称「鴻池屋伊助」である草間直方は『籠耳集』に明和8年のお蔭参りについても記しており、そのなかで鴻池屋本家、別宅でも「抜け参り」する者があったことや、「市町より申合、いろいろ施行」をしたことに触れている。「八軒屋・京橋・片町へ出張、施行致候もの有之」と書いているので、明和8年のお蔭参りにも古堤街道が利用されたことが分かる[草間直方、1976、p.406]¹⁾。

諸福天満宮に入る道を少し過ぎた街道筋北側(大東市諸福1丁目)には明治2年建立の道標があり、「西のぞき / いが いせ / なら 郡山」と刻まれている。ここには天保2年2月に河州諸福村若中世話人が建立した天照太神宮燈籠もある。この燈籠は「おかげ」燈籠であり、文政13年のお蔭参りとお蔭踊りに関連したものである。諸福から少し南東にはずれ寝屋川を渡り東方に進んだ灰塚3丁目に素戔鳴神社がある。さらに350mほど東にいった道路沿い(灰塚3丁目)に天保2年2月建立の太神宮燈籠がある。素戔鳴神社社殿壁に掲げられた「灰塚の歴史」解説板には、文政13年のお蔭参りの際に北河内・中河内の農民も抜け参りをしており、「灰塚の農民もこの群衆にまきこまれ、参宮している。これを記念して」この燈籠が建立されたと記されている(大東市におけるお蔭参りとおかげ燈籠については『大東市史』、1973、pp.409-14)も参照)。先に進み、JR片町線住道駅東側の本通商店街を東に抜けて行くと南北に通る河内街道と交差する。この交差から河内街道を恩智川を越えながら250mほど北に行ったところに本伝寺がある。ここにも移されたものであろう「御影踊中」が天保2年2月に建立した太神宮常夜燈がある。

古堤街道は河内国側では「中垣内越」とも言われていた。その中垣内(大東市中垣内)の街道

からやや南に位置する須波麻神社前(中垣内3丁目)には、文政13年12月に「御影踊連中建之」太神宮燈籠がある。この太神宮燈籠は東高野街道と中垣内越をする道との辻にある道標にもなっていて、四角柱の竿に「太神宮 東 なら 木津」「北京 御影踊連中建之」「西 大坂 庚文政十三年寅十二月吉日」「南 高野山 世話人 若中 きく清 新五郎」[荒井留五郎、2002、p.336]と刻まれており、「伊賀越」の道筋が示されている。さらに、中垣内からつづら折りの山道を登り一端府道8号線に出て、その先を左折して龍間不動尊がある集落に入っていく。その西北角に建てられた年代は不明だが「西(右) たはら たかやま きづ いが いせ(道)」と刻まれた道標がある[同上、pp.103-4;生駒民俗会、2015、p.50]。再び府道8号線に出てこれを東側に横断し、龍間神社がある集落に入る。龍間神社には慶応4年3月に建立された「太神宮燈籠」がある。これは慶応3年のお蔭参り、ええじゃないかに関係しているのであろう。これらの道標から、この古堤街道が岩船街道・清滝街道など暗越奈良街道や龍田越奈良街道へ南下する街道に交わるものであるが、大



須波麻神社前おかげ燈籠
「太神宮 東 なら 木津」
文政13年12月御影踊連中建之

坂京橋から東へ東へと木津へ至り、さらに伊賀越奈良道で長野峠越えをして伊勢へ至る道筋であったことは明らかである。

生駒山中に入り生駒市田原地区を北谷川・天野川沿いに抜けて、天野川にかかる大阪府と奈良県との境界にあたる両国橋を渡り、国道168号線(南北に通る岩船街道・清滝街道)出店交差点から白庭台の大規模住宅街に入っていく(生駒の道路については、『生駒市誌 資料編Ⅲ』, 1980, pp.298-300; 『生駒市誌 (通史・地誌篇) V』, 1980) ²⁾。この白庭台くすの木公園(生駒市白庭台3丁目4)に江戸期に建立され、南面に「右 なら 郡山 左 きづ いが いせ」「施主常磐」、東面に「左 大坂」、西面に「右 大さか」などと刻まれた石道標が立っている((大規模な住宅開発のためにこの石道標も移転されたと考えられる。刻まれた方向指示から、古堤街道を高山方向に進む、つまり北東方向に進む者に対して「正面(上の南面)」となるように建てられていたと考えられる。「正面」の「右」への案内は、石道標から南東方面へと続く道があったことを示している。南東方面の(近鉄学研都市線)白庭駅前公園に古い石仏がいく

つかあることからこの付近を通り、さらに南側の住宅団地の東側を巡るように進むと富雄川に向かって下りていく道に出る。下りて行けば富雄川沿いの県道7号線(枚方大和郡山線)に合流する。ここは、生駒市上地区である。県道7号線の東側には本堂が国宝である行基開基とされる長弓寺がある。県道7号線を南下すれば郡山や奈良方面へ行く))。

さらに北東方面に進み、上町台住宅地の東側を巡りながら北上して国道163号線に出て、そこを右折する。富雄川を高山町芝の芝橋で東に渡る。国道163号線と交差しながら下って行くとやがて山田川にかかる両国橋(大和国と山城国との分界)に至る。山田川沿いに進めばやがて木津に至る。山田上川原には、江戸中期に「武右衛門」「太良兵衛門」が建立した西面に「右きす い可」「ひだり はぜみち(吐師道)」, 南面に「左 大坂」と刻まれた石道標がある。また、山田上川原の西側の柘榴地区にも「右 きす い可 左 はせみち 大坂」と刻まれた石道標があったと記録されている[上野英雄, 1993, p.5]。伊賀越の街道(伊賀街道)が見えてきた感とする((地元では「大坂道」と呼んでいる。古絵図(相楽郡絵図)には山田村から山田川沿いに西に行き、両国橋付近で権谷川を北上・西北に向かい大和国高山村中村に至る「北川越」が描かれている[ふるさとデジタルアーカイブ「せいかな舎」, 「山田川流域の古絵図と古文書」](この「北川越」は[生駒民俗会, 2015]の表紙絵に使われた古絵地図にも描かれており、中村・高山・北田原を経て四條畷に通ずる「清滝越」へと続いている。高山の生駒市立北小中学前、県道7号線向こう東側(出店橋南)に石道標があり、西面に「いが いせ きづ やましろ 道」、東面に「すぐ 大坂」、南面に「南 なら」、北面に「やわ多」と刻まれている))。

さて、『生駒の古道』[生駒民俗会, 2015]によれば、古堤街道には大東市中垣内から生駒山地を登り、途中で龍間方面へ行く道と分かれて東南東方向へ進み俵口(生駒市俵口町)へと至る南ルートがあったという。俵口村の西北方に



白庭台くすの木公園石道標

南面「右 なら 郡山

左 きづ いが いせ」「施主常磐」

かつてあった「宝生寺」には享保18(1733)年の銘がある「石屋形内道しるべ地藏」があり、これには「右 なら こうや山道」「左 山城 木づ」と刻まれていた[生駒市教育委員会, 1977, p.36]。このルートは生駒川沿いの清滝街道にも、奈良方面にも通じているが、「山城、木津」を経て伊賀越奈良道にも通っていたのである(旗本松平氏の陣屋が俵口東方の辻村にあった。この陣屋は「京都、大坂、奈良、郡山方面へ通じる道路の四つ辻」付近にあったという[『生駒市誌 資料編Ⅰ』復刻版, 1980, p.316]。生駒陣屋跡が近鉄東生駒駅北200mほどの辻町第2公園にある)。「宝生寺」は[生駒市教育委員会, 1977]の付地図にも示されているが、すでに寺地は売却され現在はすっかり住宅地に変わっている(付地図では宝生寺跡まで辿り着くのは困難である。道を尋ねた際、たまたまその方が宝生寺前の土地を耕作していたことがあるということと途中で道案内をしてくださった。感謝あるのみです)。地藏尊は付近の公園などに移されているかもしれないと思ひ歩き回ってみたが、その姿は見付けられなかった。道が廃れ地域の景観が変貌すると、人々は過去の歴史的なことがらを思い浮かべることは全くできなくなり、現状からしか地理的空間を認識できなくなっていく。

生駒ふるさとミュージアム収蔵品に「大神宮おかげまいり柄杓」がある(生駒市デジタルミュージアムで閲覧可能。素戔鳴神社の慶応3年の「おかげ踊り絵馬」も)。この柄杓には柄は残っていないが、径が7cmほど、高さ7~8cmほどの竹製のもので、「大神宮 おかげ 文政13年庚寅 うる三月二日」「和州 俵口村」と墨書されている(生駒ふるさとミュージアムには、この「おかげまいり柄杓」を倉庫から出して見せていただいた。記して感謝の意を表したい)。大和国国中では3月27・28日ごろからお蔭参りの集団が見られ、それを「お蔭参り」と認識したという記録[『甚太郎一代記』, 1994, p.165]からすると、俵口村からお蔭参りの出発はそれから4・5日ほどでのことであり、か

なり早いものであったといえる。古堤街道、暗越奈良道などの伊勢参宮の道を通して、俵口村からも、生駒谷の他の村々からも文政13年のお蔭参りがなされたことであろう。

これは孫引きであるが、山崎清吉『高山地名考』には、生駒の高山は枚方や四條畷など北河内との東西南北の交通の要衝であり、伊賀に通じ、また龍田に通じ、さらに南都なら、郡山に通じていたこともあり、文政13年のお蔭参りの際には高山を通行した同者が何と「無慮三十万人に達した」という記録が高山八幡宮(生駒市高山町字大門)に伝えられているという記述がある[生駒民俗会, 2015, p.84]。

Ⅲ 伊賀越奈良道を歩く

[奈良大学鎌田研究室, 2002, p.29]に見たように、道中記をもとに伊勢国・伊賀国と大和国間の伊勢参宮道をあげてみると、「伊勢本街道」・「青越伊勢街道」が主要街道で、「伊賀越奈良道」は「そのほか『伊勢街道』として使われた道」扱いであった。南都奈良町から上街道を南下し初瀬街道を行くものに対して、「伊賀越奈良道」は奈良町から奈良坂方面へ北上する。山城の木津方面へ向かう京街道(奈良街道)を奈良豆比古神社付近で右折して東に進む。奈良豆比古神社のところが「奈良坂の高札場」であり、京街道(奈良街道)と大和街道とが交差する三叉路となっており、「札の辻」であった。ここに弘化4年7月建立の石道標があり、京街道を北上する者に対して「南 右 い可 いせ すぐ京 うち道」と案内している。東に進むと現奈良市緑ヶ丘浄水場内に安永2年建立の「太神宮 左 いが いせ」と刻した石道標が建っている。浄水場内に通っていた大和街道・柳生街道は県道369号線に変わっている。道標に従って左折して、上梅谷・おかゆ峠(といっても、今やおかゆ峠に入る山道を歩むことはできない。土地の人の話では、かつてはなんとか峠の頂付近まで行け、そこに「おかゆ」を炊くために汲んだとされる井戸跡らしきものもあったとのこ



奈良坂(奈良豆比古神社)高札場跡と石道標
東面「右京うち 左かすが 大ぶつ道」

とであった)を経て、(木津市加茂町)高田・里を通過して加茂宿に至る。ここから笠置・島ヶ原など木津川を遡り伊賀上野をめざすことになる(伊賀街道を古地図を頼りに歩き、記述したものに『加茂町史第二巻近世編』, 1991, pp.258-70)がある)。この伊賀越奈良道に文政13年のお蔭参りに関連する跡は残っていないのであろうか。何らかの記録は残されていないのであろうか³⁾。

[大田区立郷土博物館, 1997, pp.8-12]は、江戸時代に関東東北地方から伊勢参宮・西国巡り・西国三十三所巡礼に上った100人の道中日記からその行程を一覧表にしている。東海道を上り先に京を始め西国を巡る事例も極わずかにあるが、伊勢参宮の後に熊野詣でへと南下する者が3割を占めている。伊勢一大和間をどのように進んだのかについては、残念ながら、明らかではない。ここでは量的な検討が課題ではないので、そのなかで(津を経由することを含めて)「伊賀街道」・「伊賀越奈良道」をとった事例が確認できればよい。例えば、文政6(1823)年菊江楼繁路の旅は「伊勢を出立した後は、松坂―久居―上野と進み奈良」に出ている[同上, p.16]。これは「月本の追分」から「伊賀越奈良道」を通ったのである(『石巻の歴史9』, 1991, pp.524-59)。伊勢参宮の後、月本から伊賀越奈良道に入

り、雲出川の渡しを舟で越えて久居に至り、長野峠(小山峠)を越えて、上野に至り、島ヶ原・大河原・笠木・木津を経て、南都に着いている)。弘化2(1845)年国三郎の旅も伊勢を出た後、「月本」で昼食を取り、その日は「長野」で泊まり、翌日には「嶋ヶ原」に宿泊し、笠置寺を詣でてから奈良に入っていることから、「伊賀越奈良道」を行ったのである[大田区立郷土博物館, 1997, p.18]。文政11(1828)年渡辺安治の旅は、京で頼山陽を訪ねた後、奈良に入り、伊賀上野―松坂を経て伊勢に至っている[同上, p.99]。渡辺の場合には、奈良から伊賀上野に出て、伊賀街道を進んでいる。[小野寺淳, 1990, p.239]にあげられているNo.2の1747年の事例でも、伊賀越奈良道を通ったことが確認できる。これらの事例から、伊勢参宮者が「伊賀越奈良道」を往来していたことを確認できるであろう。

山城国相楽郡や久世郡の人々の場合には、当然のこととして、奈良街道から伊賀(越)街道に入る(神童子峠=桜峠越えで入る場合もあったろう)のが便利であるため、伊勢参宮にこのルートを用いた「道中記」が残されている[『講参り道中日記』(安政2(1855)年, 神童子峠越えで伊賀越奈良道に入っている)), 1988, pp.216-20; 田中智彦, 2004, pp.292-3, 表1]。文政13年のお蔭参りにあたって、山城国久世郡寺田村からの事例をみると、往路は奈良街道を京方面に向かい宇治から石山に出て東海道を進み、伊勢別街道(?)で津を経て松坂そして伊勢に至っている。復路は月本から伊賀越奈良道で、久居、長野、上野を経て大河原、笠置と来て、笠置より木津川を舟で下っている。道中で参宮者の「笠印」を見るに「五畿内を初めとして」諸国の者を見たという[『城陽市史第4巻』, 1996, pp.798-800]。

さて、伊賀上野の西口の鍵屋の辻(現伊賀市小田町)は浄瑠璃「伊賀越道中双六」(近松半二, 近松加作合作, 天明3(1783)年大坂竹本座初演。これは、寛永11(1634)年に鍵屋の辻で起きた「荒木又右衛門の36人斬り(史実ではない)」で有名な日本三大仇討ちの一つと言われる事件



鍵屋の辻の石道標(文政13年8月)

「ひだり なら道 みぎ いせみち」



伊賀街道起点の地

「直ぐ 京 大阪 なら はせ 道」

に題材をとったもの)の舞台でもあるが、ここは東海道関宿から奈良に通じる加太越大和街道(奈良からは加茂・笠置・大河原・島ヶ原などを経て伊賀上野に至る、一部木津川の利用もあり得る)と、伊勢街道とが合流するところである。この鍵屋の辻には文政13年のお蔭参りの夥しい数の人々の行き交いがほぼ収束した頃である仲秋8月に再建立された石道標が今なお残っている。大和街道は菅原神社(上野天神社、「上野天神祭のダンジリ行事」はユネスコ無形文化遺産に登録)の東側で伊賀街道と交わる。伊賀街道は津藩(藤堂家)の支城がある伊賀上野と本城がある津とを結ぶ街道であるが、伊賀上野から長野峠を越えて五百野を経て月本の追分で伊勢街道に交わる伊賀越奈良道でもある。

伊賀上野の街の東口に当たる車坂に、寛政11(1799)年に万人講中が建てた太神宮常夜燈がある。街から東方の長野峠を目指して旅立つ人々の安全を祈願し、伊賀街道を旅し上野の街に入る人々を暖かく招き入れるかのようにして、この太神宮常夜燈は建っている(太神宮万人講燈籠は、山城国との国境に近い島ヶ原宿東南方面の三本松峠にあった城主認可の茶屋付近にもあった。「太神宮万人灯籠跡碑」が立っている。燈籠(嘉永元年五月建立)[荒井留五郎、

1992, p.196]は、伊賀市長田寺内の射手神社の鳥居をくぐって右手に移されている(この件に関して、伊賀市立上野図書館郷土資料関係の方々にお世話になった。記して感謝の意を表したい)。伊賀街道を進み、荒木又右衛門誕生地の荒木(上野市荒木)の集落を過ぎると服部川左岸(南岸、長野峠付近に流れを發し、西流し、伊賀上野で柘植川に合流し、やがて木津川になる)にいくつかの磨崖仏が並んでいる(荒木の石切場から中之瀬峠にかけて[三重県教育委員会, 1984, pp.207-10])。かつての平田宿、平松宿を過ぎるといよいよ布引山地の長野峠に差しかかる。国道163号線の新長野トンネルを迂回し林道を歩いて長野峠を越える。峠を下る途中で右の山側に少し入ると、かつての隧道(「明治のトンネル」「昭和のトンネル」)を見ることができる。街道と交差しながら流れる水音は長野川で、街道とともに南東方向に流れ、久居で雲出川に合流し、伊勢湾に注ぐ。峠を越えると長野宿に入る。さらに、南東方向に進んでいくと五百野(現津市美里町五百野)で、津城へ向かう街道(伊賀街道)と月本の追分に向かう街道(奈良街道)とに分岐する。県道28号亀山白山線に出合ったあたりに、津へ向かう「右 さんぐう道 右 津道」と刻まれた道標がある。県道28

号を右折し100mほど進んだところで、県道659号線上稲葉羽野線へ左折する。県道659号線を茶屋公会所を越えて少し進んだところに、天明6(1786)年2月に伊賀油中買連中によって建てられた伊賀越奈良道茶屋の道標(津市稲葉町茶屋)が残されている(この付近はかつては三軒茶屋とよばれた。道標は少し移設されているという)[『久居市史 下巻』, 1972, p.4; 三重県教育委員会, 1984, p.185]。この道標には「すぐ津道」「右さんぐう道」「左なら大さか道」と刻まれている。そして、道標の横には天保3(1832)年8月に建立された御神燈(太神宮常夜燈)がある(基礎には「五穀成就」と刻まれている)。こうして街道の分岐点に文政13年のお蔭参りの興奮の名残りを留めているのであろう。

この街道の分岐点は旧美里町五百野であるが、現在「伊賀越えならみち茶屋の道標」がある場所は旧久居市域である。分岐点で月本の追分で伊勢街道に合流することを目指して伊賀越奈良道を進もう。蛇川(大谷川)を過ぎると、16世紀に木造(こつくり)氏の居城であった戸木城を中核としてつくられた戸木の集落・街に入る(1955年に旧久居町に合併するまでは戸木村)。戸木の街の北方、県道165線を走るバスの

停留所「戸木神社前」すぐのところに敏太(とした)神社(通称戸木神社)がある。19世紀初めの文政期にはすでに始まっていた、10月に豊年を祝う「かんこ踊り」が今も続いている。この敏太神社の参道を少し入ったところに、天保2年2月に氏子中によって建立された常夜燈がある。竿の一面に「神」の文字などが見えるが判読できない。火袋の石の色が違うなど、後の時代に直されたことが分かる。しかも、この神社の参道及びそこにある献燈が醸し出す雰囲気、この常夜燈はそぐわない。[久居市教育委員会, 1985]によれば、この常夜燈は、元々は戸木の集落内にあり、「参宮街道と戸木集落内にはいる三叉路に建てられていた」という(この冊子にある写真と現状とは異なる)。その場所はどこか。「久居ふるさと文学館(図書館)」の職員の方が調べてくれた結果、戸木集落のなかほど、街道筋にある辻岡味噌醤油醸造元(大女将の記憶による)の向かい側にあったとのことであった(文学館職員の方の尽力には感謝の意を表したい)。^[三重県教育委員会, 1984, pp.180-1]には、この「常夜燈は昭和19年の南海地震で壊れ、現在は少し北の敏太神社境内に放置されている」と書かれている。これが現存の常夜燈なのだろうか。^[同上]は続けて、「またこの神



茶屋(津市稲葉町茶屋)の太神宮常夜燈(天保3年)と道標(天明6年)「右さんぐう道 左なら大さか道」

社参道は、昔は街道まで延びており、その入口の辻に、今も倒れた常夜燈が残っている」とし、また地図におそらくその常夜燈があった街道沿いの位置が示されている。その位置は辻岡醸造よりも200mほど西側で、敏太神社の参道を南に延ばし西向寺の東側を街道まで出てきたところである。この場所には、現在は常夜燈も何もない〔久居市教育委員会、1985〕「42、戸木町敏太神社旧参道入り口」に倒れたままの常夜燈の写真がある。それには「明治廿五年十月建之」と刻まれていた。〔同上〕中の「戸木町周辺」の常夜燈地図でも確認できる。〔『久居市史下巻』、1972、p.492〕に「江戸時代の常夜灯(有銘宮立灯籠)」一覧があり、このなかに現存のものに合致する「戸木町戸木神社前」に「天保二辛卯年二月氏子」の燈籠がある。〔三重県教育委員会、1984〕の記述が全面的に正しいとすれば、発行の順序からして、『久居市史』にある燈籠は第3の燈籠になってしまう。いずれにせよ、現在敏太神社参道にある「天保2年2月」に建立された常夜燈がかつては伊賀越奈良道沿いにあったことは確かであり、「集落内に入る」ところにあったということから「施行」が行われたことも想定され、文政13年のお蔭参りに関連しているであろう。

戸木を過ぎ、久居の街に入る。久居は藤堂高通が寛文9(1669)年に「陣屋」を置き、それを中核とした「陣屋町」を形作ったところである。「ならみち」は久居陣屋を大きく巡るように久居の街を通っている。戸木から久居に入って、東北方面に進み、右折して途中にクランクはあるが東南東に進み、旅籠町に至る(ここにかつては、「右さんぐう道 左なら道 天保二年」と刻まれた石道標があった〔三重県教育委員会、1984、p.180〕)。ここを右折して久居本町を南南西に進み、久居二ノ町を左折して東南方面の小戸木、川方、牧へと向かう〔『久居市史上巻』、1972、p.252〕。久居二ノ町の左折点には上半分が折れて無くなった石道標が建っている。補って読めば、「(左さん)ぐう道 (右な)らみち」と刻まれていたのであろう。今や連

担した街並みになっている旧久居市域を旧桃園村の牧(現津市牧町)まで来ると、雲出井用水が牧町を南西角とする台地状の地形に添うように流れ(台地という表現は〔三重県教育委員会、1984、p.178〕)、その南方面は田園が広がっている。そして、南西には雲出(くもず)川が流れている。

久居の街中を通っている「ならみち」の何か所かには、いにしへの石道標が残されているのに加えて、新たにこれらを模した石道標が建てられている。これらを見ていると、街の人々に「ならみち」の歴史的伝統を伝え、私のような街道歩きの人々を助けるとともに、この「伊賀越ならみち」と久居の街並みを観光資源として見直そうとしているように思われる。

牧町に入って来ると、近鉄桃園駅から南南西方向へ来る道が街道と交わる手前に「右さんぐう道 左ならみち」と刻まれた旧い石道標がある。さらに、街道を南に進み家並みと突き当たる所で街道は左折する。ここに写真で示した石道標があり「左さんぐうみち 右ならみち」と刻まれている。この道標があるところで街道を逆方向に右折し、少し歩くと「八柱(やばしら)神社」に至る。狭い境内と小さな社殿があるのみだが、この境内に「天保二年二(以下判読できない)」に建立された常夜燈がある。境内にある他の燈籠とは異なるので、「太神宮」とは刻まれていないが、おそらく「太神宮燈籠」なのではないか。基礎にも色々と文字が掘られているが判読は難しい。先ほどの戸木の常夜燈と同じ時期に牧の常夜燈も建てられている。このことから、伊賀越奈良道沿いの久居に連担する街村の南東方向からの入り口である「牧」と西あるいは北西方向からの入り口である「戸木」にそれぞれ位置する常夜燈は文政13年のお蔭参りと関連したものであり、そこでの施行を想起させるのに十分である。「牧」においては街道の屈曲点で、台地状の土地を下って行く所に位置する「八柱神社」前で施行がなされたであろうことは十分に考えられる。

台地状の土地の上にある牧からは、街道は



伊賀越奈良道石道標(津市牧町)
左 さんぐうみち 右 ならみち



月本の追分(松阪市中林町)
「右 いがご江なら道」



常夜燈 天保2年建立
津市牧町八柱神社境内

南, 東, さらに南へと曲がりながら, 新家(にのみ), 木造を経て雲出川に出る。ここに渡しがあった。雲出川は治水のための改修がなされているが, 牧の南西から南側にやや蛇行しながら流れ, 東向きの流れとなって伊勢湾に向かう。

雲出川を渡り, 南東方向に進んで行くと, やがて月本で伊勢街道に交わる。ここが月本の追分(旧一志郡三雲村中林, 現松阪市中林町)である。ここには「月本おひわけ」「右 いがご江なら道」「右 さんぐうみち」「左 やまとし七在所順道」と骨太の文字で刻まれた高さ3m余りの石道標が建っている。この石道標は, 天保13(1842)年に, 月本の角屋清兵衛ほか奈良までの道中の旅籠屋4人によって建立されたものである((松坂市教育委員会「月本追分」説明板(2007年3月)による))。伊勢街道および伊賀越奈良道のそれぞれの方向からやってきた人々に, その行く道の案内をしている。追分の伊勢街道の東側には大きな常夜燈もある。その昔, 月本の追分には茶屋があった。旅人たちはここでしばし体を休め, 絵地図などを広げて道のりを見な

がら、行く先に思いをはせたかもしれない。あるいは、旅人どうしが、これまでの街道や宿場についての情報を交換しあったかもしれない。こうした光景は今も昔も変わらない。

久居と文政13年のお蔭参り

伊賀越奈良道は牧から久居・戸木の街を貫いている。文政13年のお蔭参りの際、久居の街・久居藩ではどのような状況だったのであろうか。久居宿の間屋清水長太夫六郎右衛門□義が子孫に天保元(1830)年12月大晦日に書き残した「[天照皇太神宮御影参由来]」, 1984, pp.239-40]によって見てみよう(文政13年12月10日に天保に改元)。彼がこの「由来」を書き残したのは、以前のお蔭参りの記録が火災などで失われ「何之書付等も無之」状態であり、「亦々後々ニ及、御影参可有之事も難相斗存候」だからであり、「六拾年目ニは定而御影参可有之儀」であろうからであった。お蔭参りが60年周期で起こるといふ人々の認識にもとづいていた。

「由来」によれば、この年の「閏三月朔日頃より、四国阿波国より御影参初り候由」や「大坂え拾万人程着船有之由」の情報が伝えられていたが、「乍去全是風聞斗と存居候」であった。どうもお蔭参りが始まったことについては伝聞に過ぎないと当初は思っていたようである。ところが、「四五日頃より」「あノ字印」をつけた笠に、「おかけと書付有之手杓壺本宛持」お蔭参りの「男女老若至迄夥敷来ル」ようになり、これはいよいよ本当のことであったと考えるようになり、それへの対応に追われることになる。阿波を初め「四国不残紀州摂州泉州河州和州城州」(大和国があることに注意)の紀伊や五畿内の国々、「作州備州播州芸州」など中国地方からも続々とお蔭参りの人々が久居の街を行き交うようになった。その数は、ざっと、「当宿海道一日には拾万人余通行有之」であったという。街道はまさに「往還」であるから、この数の人々が一方向に向かっていただけではなからう(としても、この数は過大に過ぎると思うが)。宿泊者も多く、宿屋だけでは収容しきれず、「御上よりも

宿屋斗ニ而ハ旅人難儀至候ニ付、気毒にと思召候故」宿泊可能な町家に宿泊させることを認めた([みえ歴史街道構想安芸久居一志地域推進協議会, 2003, pp.46-7]も同じ史料に拠って書かれているが、史料の読み方が不十分なため、記述が誤解を与えるものになっている)。間屋を務める清水長太夫家では「凡一夜ニは貳百人程宛有之」であったという(「由来」には「旅籠町ニ而も一夜千四百人斗宛毎夜有之」「拙者方ニ而も一ト月ニは貳千人有之」とも書かれている)。「四五月頃より」は「尾州濃州信州上州関東不残奥州松前迄御影参多出、年内相握合是儀御座候」と、お蔭参りが西国からやがて東海・関東・東北地方・松前にまで広がり、夥しい数の人々が伊勢参宮へ、そして伊勢参宮のみならず西国巡りなどに赴いた。こうした混雑、人々の集中のなかで、「諸色何ニよらず高値有之」で、御上も旅籠賃、木賃、馬・駕籠賃を定めるなどこれに対応せざるをえなかった。

久居藩において領主より「大庄屋を経て、回状として各村の庄屋へ通達され、その後村内部に通達された」「触・通達」[[三重県史 資料編近世3(上)], 2008, pp.1108-9]から、文政13年のお蔭参りに関するものによって先の「御影参由来」を裏付けておこう([同上書], pp.1132-4])。当然のこととして、お蔭参りによる街や村々の状況に領主も無関心ではいられなかった。いかに秩序を維持し、領主支配を貫徹するかに意が用いられている。まず、「閏3月14日」付で、「参宮人多キ内計右之通り取計候様、旅人減少いたし候ハハ是迄之通り相心得候様被入御念候」を触れている。この触れはいくつかの事柄に関するものであった。1つめは、お蔭参りに伴う膨大な人々の流れ、そして宿泊者は、久居の御殿町や街村の収容能力を遙かに超えるものであった。そのため、「参宮人多候ニ付、宿方旅籠屋ニ而止宿差支候」お蔭参りの群衆については、「村方ニ而止宿させ候」てもかまわないし、「難渋無銭之者嘆キ候」であれば、「志有之者止宿させ候」つまり施行宿をしてもよいとした。あまつさえ、あまりに人数多数で「村

方迷惑」で止宿させることができないようであれば、「郷蔵」に泊めてもよいと領主は指示した。これは「難渋者ニかこつけ胡算もの入込」ことを防止し、止宿者に「重々気を付」、火の用心をし、秩序を維持することを図ったものであった。2つめは、宮人＝お蔭参りの人々への「旅行物并馬駕籠等」出し、施行などによって「旅人いたわり遣し候義ハ宜候得とも」、「衣裳其外御法令相背候品用ひ候」場合には「急度御差留」とした。生活のすみずみに至るまで事細かに規制を加える領主からは、旅人への対応にあたって、施行などにおいて、華美な衣装を用い、男女が異なる異様な風体で行動することを抑制しようとしたのである。「抜け参り」という雰囲気・状況において、そうした制禁が効果を持つかどうかは分からないが、3つめは、こうした施行などに「取懸」ることにかこつけて「農業手抜無之様」に「御入念」いたせとしている。それは、お蔭参りがおきた閏3月・4月5月は農繁期にあたる頃であり、「施行」に勤しんで農業に手抜きがあるような事態となれば、領主支配の根幹に関わるからであった。「壬3月16日」には追って、「参宮人多く且初蒔附之時節」であるので、「郷中一統参宮之義追而御指図有之見合候」ことを「急度」申しつけた。集落全体で参宮に出してしまうことで、初蒔きの時期を逸し、農業生産が停滞することを領主は恐れたのである。

「壬3月24日」になると、お蔭参りの状況への対応ができるようになったのか、また初蒔き附けも順調に進んだためか、領主は新たな通達を出した。1つめは施行に関することで、「志之者共壱人ニ而も或ハ申合」にても、「米何俵飯ニ焼施し申度」あるいは「小屋建粥等」あるいはまた「其外」のものを「施し申度」とする者は、「其旨書付を以」って申し出ることを命じた。もっとも、「面々之志ニ而少々ツツ施し」は数多くあるだろうから、申し出る必要はないとした。施行をすることを認めつつも、過度の施行については制限しようとしたのであろう。2つめは伊勢参宮についてで、農作業の進展をみてのことであろう、「群参詣ニ相成上書付御出し可被成

候」とし、書付を提出したうえで群参詣することを認めた。もっとも「抜け参り」もあったことであろう。

4月に入ると、街道を通るお蔭参りの溢れんばかりの人々が続いたことから、6日に通達を出し、「追々米価高値ニ相成候方難渋ニも可及」状態となったため、以降は「御蔵出し米并銘々飯料余分之米、当所ニ而売買之外他所へ売払船積等令停止候事」とした。また、「他所米買入之義」はこれまで停止していたが、「追而差図ニおよび候迄他所より買米入津差免候事」とし、米の他所よりの移入を臨時に認めた。この通達は藩内の米・食料を確保し、その値段が高騰することを防ぎ、できるだけ安定させることを意図したものであった。9日にも重ねて、6日の通達を「村々末々迄心得違無之様重々入念」に致すことを命じた。

久居の御殿町や連担する西方面では羽野・戸木から、東南方面では牧までの街村のどこで施行がなされたかは明らかではないが、領主からの通達や触によって、宿、馬、駕籠、飯、粥などのさまざまな施行が小屋掛けをしてまでも行われたことを確認することができる。天保2年2月に建立された戸木の敏太神社に現存する常夜燈や、同じく天保2年建立の牧町八柱神社の常夜燈が、これらの地域で施行が行われたことを裏書きしているように思われる。

注

- 1) [五味文彦, 2020, p.302] が、文政13年のお蔭参りが明和のそれと比べて、「その特徴は、女性や子どもが多いこと、抜け参り・お蔭参りと唱えていたこと、施行が行われたことなどがあげられる」としているが、草間直方のこの記述から、この特徴付けは適切さに欠けるであろう。本居大平が明和7年のお蔭参りについて書き残した『おかげもうでの日記』を読めば、「ちいさきちごおひだきなどしたる」女性の姿や迷子を探す母の姿、「そのひとごとに『おかげでさぬけたとき』といふことをなん、道ゆくあしのほうしにいひつつゆくを七十八十になれる老人のききて、むかしもかくおほくもうでけるをおかげまゐりといひて、そのをりもかくこそいひつつ物せしか、此たびのさま専

らそのをりのやうなりなどいふ」[本居大平, 1927, p.581] こと、そしてさまざまな施行がなされたことが確認できる。「おかげでぬけたとき」と唱えていたことは、この話をした古老の記憶に間違いがなければ、宝永2年、あるいは享保期のお蔭参りの際にもすでにあったことになる。本居大平の『おかげもうでの日記』から、五味による文政13年のお蔭参りの特徴付けが正鵠を射ていないことは明らかであろう。

幕府外国奉行が「在日公使」(p.515)になるなどという校正ミスと思われることはさておき、こんなことまで書く「逆鱗に触れる」であろうが、「逆鱗していた」(p.440; p.512) などという言い回しは初めて目にした。これには言葉「に窮する」。

- 2) 生駒市の天野川にかかる高橋(北田原新茶屋)で、四條畷方面から東に来た「守口街道・清滝街道」[武藤善一郎, 2000, pp.82-4]は、交野市私市から天野川を南下してきた「岩船街道」と交わる。清滝街道は北田原から南東方向へ鹿畑を経て木津へと続く。北田原新茶屋で東へと分けられると、高山出合橋から中村を経て(京都府精華町)東畑に出て、南山城地域から伊勢方面へ進む「田原越・南山城道」が続いている[生駒民俗会, 2015, pp.97-102]。今は不明であるが、かつて、新茶屋(北田原町北佐越 1411。天野川にかかる北田原大橋から168号線を北へ進み高橋を過ぎ、次ぎの信号を左折したあたりの穴虫川との合流点近く[生駒市教育委員会, 1996, pp.48-9])に文化14(1817)年に建立された道標があり、それには正面に「すぐ きづ いが いせ」、右面に「左 さだ(枚方市蹠跏か) 大坂右 奈良 郡山」と刻されていたという([生駒市教育委員会, 1977, pp.42-3]に「新茶屋の道しるべ」[北 田原町新茶屋]として、写真とあわせて記録されている)。「伊賀越奈良道」がはるか東方にみえる。
- 3) 伊勢参宮に関わる伊勢一大和間の街道について、[[奈良県史第1巻], 1985, pp.365-7]は伊勢参りのルートとして、初瀬観音に寄り榛原から伊勢本街道(中街道)を通る道筋、榛原から青山峠を越える青越道(北街道)、そして吉野川沿いを進み高見峠を越える伊勢街道(南街道)をあげている。[小野寺淳, 1990, p.239]は、「伊勢から奈良へのルートは、伊賀街道と初瀬街道の2つのルートが利用された。伊賀街道は長野峠を越えて、伊賀上野→笠置→木津から奈良へ、初瀬街道は青山峠を越えて、名張→長谷寺から奈良へ入るルートである」としている。この伊勢一大和間のルート認識の違いは、『奈良県史』が大和国(その国中)を中心に考察しており、[小野寺淳, 1990]は東国からの道中記を基礎にして考察していることから生じたのであろう。つまり、空間的、地理的にどこからの視

点か、そしてどこへの視点かの違いが両者にはあるからである。『奈良県史』の場合は伊賀越奈良道が脱け落ちやすいし、[小野寺淳, 1990]の場合は、東国からの伊勢参宮より熊野詣で・西国巡りという道中記の性質上、本街道や和歌山街道(南街道)が脱け落ちやすい傾向にある。

参照文献

- 相蘇一弘(1975)「おかげ参りの実態に関する諸問題について」『大阪市立博物館紀要第7冊』
- 秋里籬島(1801)『河内名所図会』
- 荒井留五郎(1992)『東海近畿参宮常夜燈』三重県郷土資料叢書第105集、三重県郷土資料刊行会
- 生駒市教育委員会(1977)『生駒市石造文化財 生駒谷』
- 生駒市教育委員会(1996)『生駒市石造遺物調査報告書』
- 『生駒市誌 (通史・地誌篇) V』(1980)
- 『生駒市誌 資料編 I』復刻版(1980)
- 『生駒市誌 資料編 III』(1980)
- 生駒民俗会(2015)『生駒の古道——生駒市古道調査』
- 『石巻の歴史 9』(1991)
- 「伊勢熊の道中記」(1991) 弘化式巳三月吉日『東吉野村史 史料編上巻』pp.799-808
- 「伊勢参宮道之記」(1992) 天明四辰三月十四日出立、平群郡東安堵庄 今村群義『安堵町史 史料編下巻』pp.921-6
- 「伊勢道中記」(1982) 弘化五年申三月参り『泉南市史 史料編』pp.682-5
- 井上頼壽(1940)『京都古習志』館友神職会
- 上野英雄(1993)「石の聲——精華町の道標と記念碑」『精華町の史跡と民俗』精華町
- 大田区立郷土博物館(1997)『特別展 弥次さん喜多さん旅をする——旅人100人に聞く江戸時代の旅』
- 小野寺淳(1990)「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷——関東地方からの場合」『人文地理学研究』XIV, pp.231-55
- 小野寺淳(1995)「東播磨における近世の伊勢参宮——明石市東二見を事例に」『交通史研究』35号, pp.84-95, 寛政5(1793)年「道中入用帳」から
- 兼本雄三(2000)「近世における伊勢信仰の展開——地域史と生活史の統合を目指して」『兵庫県社会科学研究会 研究紀要』第46号, pp.2-9, 兵庫県高等学校教育研究会社会部会
- 鎌田道隆・安田真紀子(2006)「加太越奈良道の研究と現地踏査」奈良大学『総合研究所所報』pp.149-57
- 『加茂町史第二巻近世編』(1991)
- 草間直方(1976)『籠耳集』『日本都市生活史料集成四城下町編 II』所収、藤本篤解題参照(同書, pp.21-3)
- 「講参り道中日記」(1988) 安政2(1855)年2月22日出立「史料が語る城陽近世史——第三集・寺田地域編」pp.216-20, 城陽市教育委員会

Oct. 2022

伊勢参宮の道とお蔭参り（上）

五味文彦(2020)『文学で読む日本の歴史 近代的世界篇 田沼政権——革命・文明』山川出版社
 『参宮万日記』(2011) 癸享和三(1803)年亥三月吉日『新訂 王寺町史 資料編』pp.497-509
 『三郷町史』(1976)
 『城陽市史第4巻』(1996)
 『大東市史』(1973)
 『寺社縁起』(1975)「日本思想大系20」岩波書店
 『甚太郎一代記』(1994) 廣橋壽彦編『甚太郎一代記——無足人吉川家記録』清文堂史料叢書第68刊, 清文堂出版
 『大日本諸国道中案内記』(1998) 今井金吾監修『道中記集成第28巻』大空社
 田中智彦(2004)『聖地を巡る人と道』田中智彦論文集刊行会, 岩田書院
 『都祁村史』(1985)
 「天照皇太神宮御影参由来」(1984) 三重県教育委員会『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道——歴史の道調査報告書』pp.239-40
 『天理市史』(1958)
 中庄谷直(2006)『関西 山越の古道(上)』ナカニシヤ出版
 『浪花講定宿帳』(2008) 今井金吾監修『道中記集成第41巻』大空社
 『奈良県史第1巻』(1985) 地理—地域史・景観
 奈良大学鎌田研究室(2002)『復刻版 宝来講道中細見記』増補三訂, 宝来講道中細見記作成委員会編集, 奈良大学総合研究所
 西辻豊(1981)『八尾の道標』八尾郷土文化研究会
 久居市教育委員会(1985)『郷土の文化Ⅰ ふるさとを照らす常夜燈』
 『久居市史 上巻』(1972)
 『久居市史 下巻』(1972)
 平群町教育委員会(1992)『平群町石造文化財「平群谷」』
 『平群町史』(1976)
 平群町役場(1997)「ふるさとへぐり再発見114 伊勢参りとおかげ灯籠」『マイタウン 平群』第398号
 牧村史陽(1970)『お蔭参りとお蔭燈籠』史陽選集刊行会
 三重県教育委員会(1984)『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道——歴史の道調査報告書』
 『三重県史 資料編近世3(上)』(2008)
 みえ歴史街道構想安芸久居一志地域推進協議会(2003)『みえ・まんなか学のすすめvol.2～わが町から歩いてみよう～』執筆編集千種清美
 水谷知生(2020)『地域創造学研究』『奈良県立大学研究季報』第31巻2号, 奈良県立大学
 武藤善一郎(2000)『大阪の街道と道標(改訂版)』サンライズ出版
 本居大平(1927)『おかげまうでの日記』『本居大平全集

本居宣長全集第11巻』吉川弘文館
 『八尾市史 文化財編』(1977)
 『八尾の史跡』(1987) 八尾市市長公室広報課編, 八尾郷土文化研究会編集
 安田真紀子(2005)「近世の旅観と街道の変容——参宮と大和めぐり」『奈良史学』23号, pp.33-46, 奈良大学史学会
 拙稿(2021)「50年目の読者より——日本思想大系58『民衆運動の思想』(岩波書店)「浮世の有さま」二の校注によせて」『阪南大学論集人文・自然科学篇』第57巻第1号

(2022年7月15日掲載決定)